

竹内街道における歴史的町並みの景観形成に関する研究 —大阪府太子町春日地区・山田地区を事例として—

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程
森 椎菜（下村・阿久井ゼミ）

1.研究目的 竹内街道は、日本最古の官道として古代より整備されてきた古道である。しかし、近年の都市化により歴史街道のイメージは消失してきており、街路景観保全の機運が高まってきている。本研究では、竹内街道を対象に、地形特性、沿道建物特性等の物的環境特性と景観特性との関係性を捉えることにより、歴史的町並みの景観形成のあり方を探った。

2.研究方法 本研究では、地形や沿道建物状況といった物的環境の異なる太子町春日地区と山田地区を対象に設定した。まず、各地区について、歴史的な街道の姿を史実や昔話等の文献資料から探り、街道が生活・交流の場として親しまれてきたことを捉えた。次に、両地区の街路景観について、景観構造と景観特性の解析から明らかにした。景観構造については、街道軸縦断方向の断面図から捉えた傾斜度によって設定した区間毎に、横断方向の傾斜度及び現地調査と Google map から作成した屋根伏図より沿道建物特性(和風/洋風・平入/妻入)を捉え、物的環境が同質の区間毎にゾーニングを行った。景観特性については、R3.8.30～9.9 に 5 名の被験者を対象とした写真投影法により調査した。本調査では、3 名以上が良好な景観と評価した 30 地点(春日 12 地点, 山田 18 地点)を選び、ゾーン別の撮影地点数と景観写真の画面構成率から、各地区の景観特性を捉え、地区毎の景観形成のあり方を探った。

3.解析結果及び考察 【物的環境特性】春日地区は、縦断方向の傾斜度より 5 区間に分けられ、横断方向の傾斜度と建築特性によって K-I～III の 3 ゾーンに分けられた (図 1)。K-Iは、緩やかな傾斜で西側が高く、曲線の街道両側に家屋がまばらに並び、妻入が 52.0%と多いが、洋風の陸屋根も見られた。K-II は、縦横断共に平坦で直線の街道両側に家屋が密に並び、平入が 77.8%と大半であった。K-III は、緩やかな傾斜で河川の通る東側が低く、曲線の街道両側に家屋が密に並び、和風が 56.7%、妻入が 47.8%と多かった。地区全体では、平均傾斜度が 1.4%と緩やかな傾斜で沿道の標高差は小さく、妻入が 44.0%と多かった。一方、山田地区は 7 区間が Y-I～IV の 4 ゾーンに分かれ、街道は曲線であった (図 2)。Y-Iは、やや急な傾斜で東側が高く、片側にまばらにある家屋は、洋風が 71.4%と多かった。Y-II は、縦横断共に緩やか～急な傾斜へと変化する街道両側に家屋が密に並び、和風が

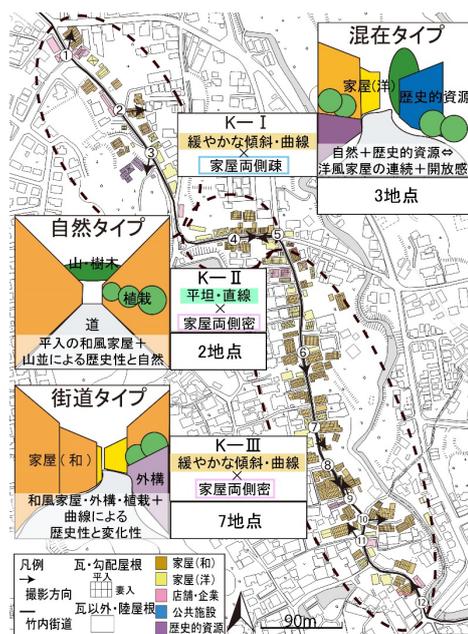


図1 春日地区ゾーニング地図

59.0%、平入が 64.1%と多く見られた。Y-III は、縦断方向は緩やかで東西に下り傾斜である街道片側に、平入和風が密に並ぶ。Y-IV は、縦断方向はやや急で、東西に緩やかな下り傾斜である街道両側に家屋がまばらに並び、洋風が 60.0%と多かった。地区全体では、平均傾斜度が 5.6%とやや急で沿道の標高差も大きく、平入が 63.0%と大半であった。【景観特性】撮影地点数をゾーン別に見ると、春日地区は K-III が 480m 区間に 7 地点と最多で、I(270m) が 3 地点、II(120m)が 2 地点と続く。最多の K-III は、和風家屋・外構の画面構成率が 30%以上を占める景観が 4 地点と多く、他にも家屋を見上げる地点⑩や路地の家屋を見下ろす地点⑩等、和風家屋を基調に街道線形に沿って変化性的な歴史的景観が評価され、街道タイプと言える。K-IIは、寺と石垣が 20.8%、自然物が 32.8%である妙見寺③など、歴史と自然の調和した景観並びに洋風家屋も多く、混在タイプと言える。K-II は、地点④⑤共に平入の和風家屋が 30%以上で、遠景の山並みが地区内で唯一視認できる歴史と自然の調和した景観で、自然タイプと言える。一方、山田地区では Y-II が 380m 区間に 13 地点と最多で、III(80m)が 3 地点、I, IV(160m)では 1 地点と続く。最多の Y-II では、和風家屋や石垣や漆喰等の和風外構が 30%以上を占める景観が 8 地点と多く、植栽等の自然物も 10%以上見られた。また旧山本家住宅⑬' や正泉寺⑩' 等の歴史的建築物、屋根伏せや盆地を見渡す眺望景観⑭' もあり、街道両側の家屋を基調に線形・傾斜による変化性と豊かな歴史性が維持された、街道タイプと言える。Y-III は、街道東側に迫る山が 30%以上、平入の和風家屋と外構も約 30%と、歴史と自然が調和した景観が移り変わる地点を含む、自然タイプと言える。また、Y-Iは地蔵堂が 9.8%、山が 18.5%を占める地点①' のみ、Y-IV は平入の和風家屋が 22.9%、樹木等の自然物が 16.0%見られた地点⑱' のみであった。両ゾーンは、洋風家屋の多さや家屋のまばらさから生じる開放感によって景観の魅力が低下しており、混在タイプと言える。

4.まとめ 以上より、春日地区は景観同質の 3 ゾーン、山田地区は 4 ゾーンに分かれた。両地区に共通して、街道タイプ(K-III, Y-II)では、和風家屋や街道の線形が歴史的イメージを形成していることから、今なお多く残る沿道家屋の建替時には意匠・形態・色彩等への配慮が不可欠である。平地の春日地区では、混在タイプ(K-I)において、街道タイプと同様、家屋の保全と共に、寺院等の文化的資源の継承が重要である。また、洋風家屋の視認性を妨げる植栽や外構の設置により、妻入家屋の町並みを継承することで、地区全体の魅力向上が期待できる。一方、山手の山田地区では、自然タイプ(Y-III)において山麓の旧集落の景観の評価も高く、里山的な維持管理が重要である。さらに、混在タイプ(Y-I)は、K-Iと同様に、洋風家屋への対応が必要であり、Y-IV は隣接する自然タイプ(Y-III)との連続性に配慮した家屋の保全とともに緑量の確保等が重要である。

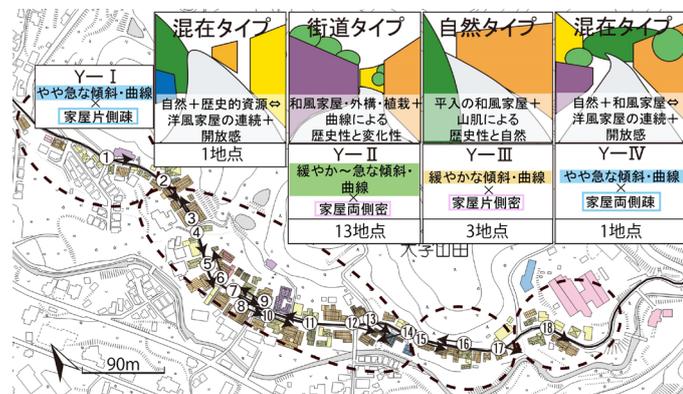


図2 山田地区ゾーニング地図